

〔曲名〕 Danza e Cantabile

唄と踊

〔曲種〕

〔作曲者〕 R.Calace

ラファエレ カラーチェ

〔編曲〕 Jiro Nakano

中野二郎

### 《弦楽器製作家としてのカラーチェの家系》

Nicola (Raffaeleの祖父) 1794年Procidaに生まれ、

1825年弦楽製作を始め主としてギターを作って著名になったが1869年亡くなると息子Antonioに受け継がれた。

Antonioは1828年Procidaに生まれ父の後を継いだ但元来多才な素質がありナポリに移って工場を拡張し、

リュートとマンドリンの製作に没頭して大いに発展したが1875年亡くなるとAntonioの二人の息子NicolaとRaffaeleに受け継がれた。

兄Nicolaは1859年ナポリに生まれ、弟Raffaeleと共にカラーチェ兄弟の名の許に製作が続けられたが

1901年Nicolaがこの仕事を放棄してアメリカに移住したのでRaffaeleによって仕事は続けられた。

この時期Mandolira Calaceが考案され特許を得たが余り普及するには至らなかった。

Nicolaはアメリカに渡って1923年亡くなったが素質に恵まれていたにも不拘成功せず消息を詳かにしない。

Raffaeleは1863年12月29日ナポリに生まれ、プレクトラム音楽の輝かしい発展に刺戟され、天性の豊かな素質と芸術家として50年のエネルギーをこの仕事に注いだ。

忘れられたリュートを今日の光輝ある姿にしマンドリンを完成し、高い地位に引き上げた。

勿論之には彼が演奏家とし作曲家として高く評価されたのが預って力があつた。

Raffaeleは1934年11月14日ナポリで亡くなったが、最後の数年間は彼の息子のGiuseppe引継がれ、その名も“Comm.Raffaele Calace & Figlio” となった。

Giuseppelは1899年2月21日ナポリに生まれ、父の業を継ぎその名を恥かしめなかったが1968年1月5日に亡くなり今日ではその若き息子Raffaelによって継承されている。

以上は製作家としてのカラーチェの家系であるが、我等に最も親しいRaffaeleは兄Nicolaと共にナポリ音楽学校を卒業し、

Raffaeleは作曲で最高賞を得た。

以後死に至るまでに別表に示した作品があり斯楽の至宝となっている。

又マンドリン及びリュートのヴィルトオーズとしてヨーロッパの各地に目見え1924年には我国を訪れ、東京、

京都、大阪、名古屋で演奏会を開き大成功を収めたことは洽（あまね）く人の知るところである。

又多くの自作をレコードに録音し、裕仁殿下（現天皇陛下）並に皇族方の為に御前演奏を行い旭日賞を受けた。

作品は135番懐郷の唄は現皇后陛下に捧げられたものである。

Raffaeleの作品は凡て自家出版であるが初期は他の作者のものも多く出版し（ボーンはこの反対を述べている）

渡日以後は専ら自作品のみを扱うようになった。

初期には、Ch.Acton、F.Amoroso、L.w.Beethoven、A.Castaldi、G.Ciociano、A.Cimmino、

D.Miniello、F.Della Rosa、L.Fiorillo、N.Romano、G.Silvestri等の作品を出版している。

作品表には判明しているものは洩れなく記載したが尚且不明の欠番があり初期後期に之等が多い。

本年三月高橋功氏が渡欧の帰途わざわざナポリのカラーチェを訪ね、

未出版曲のリストを写し取って来られ御教示頂いたので之等も含めた。

従って一般には全く知られていない後期の作品が入っている。

然しそれでも猶不明の分があり、第十三前奏曲はマヌスクリプトが紛失している由。

以前、田中常彦氏も述べていられる通り、初期の出版譜には作品番号が付されていないものがあり、

又番号が付されたものも、後になってカラーチェ自身が作品番号の整理をした形跡があり、

色々旧カタログを見ると幾多の矛盾があるが（ダブッていたり食い違いがある）最終的なカタログを大

体基として作成した。

被献呈者名も初版には殆んど記載されているが楽譜の表紙が劃一的なカタログ風のものになってからは省略されたものが多い。

作品表の中でOp133のみが英国のBMG誌に発表されて他は全部自家出版で

§印は未出版、\*印は後になってカラージェ自身によりマンドリンオーケストラに編曲されたもの。

猶Raffaeleには三男四女があり長男Vincenzoは1890年2月12日に生まれナポリの音楽学校出身のピアニスト。

ベルリンのBusoniにも学び、イタリア、ドイツ其他に楽旅、

1924年から1960年までミラノの音楽学校の教授及副指揮者であったが1961年10月8日ミラノで亡くなった。

長女Mariaは1896年に生まれ、父の後を継ぎマンドリニストとして名を成した。

父と共にヨーロッパ各地で演奏、レコードも多く残っているが、1967年6月22日惜しくも亡くなった。

次女Vittoriaは1897年に生まれたピアニストで父や姉の伴奏等をし三女Eleonoraはヴァイオリンをよくし日本のイタリア大使館附通訳官コルッチに嫁いだが不幸夫君の早世に逢って恵まれなかった。

次男Giuseppeは奏者としては姉のMariaと組んでQuartetto Romanticaと称しMandolaを受け持ったこともあるが

父の後を継いで製作に従事した。

四女Biancaは1900年生まれ、三男Giovanniは1902年に生まれた以外は詳かにしない。

本曲 唄と踊は初版譜には作品番号は付されていないが

其後カラージェ自身により整理されたと感じるものには作品30番となっている。

作品表に見られる通りマンドリンとピアノに書かれたものが多く、

後になってマンドリンオーケストラに編曲されたものも多いが本曲は入っていない。

本領はマンドリン独奏によりて面目躍如たるものになるであろうが、初期の作品で覇気に富み魅惑的であるので敢えて合奏の形にしてみた。

踊の部分の後打ちのリズムの巧拙によって曲が左右される。

マンドリン合奏には比較的斯うした手法は用いられないが管弦楽の舞曲の第二ヴァイオリン又はヴィオラには非常に多い。

原譜には冒頭の手拍子は示していないが、四分の三拍子の唄の部分の手拍子をとった。

1970年5月20日発行

イタリアマンドリン百曲選第5集より